

タブマネってこんな人

①広島県呉市市民部地域協働課 上垣慎一

広島県呉市生まれで、大学卒業後地元に戻り市役所の事務職で様々な分野に従事。

令和3年6月から、国際交流センターの業務に関わることになり、令和4年度に多文化共生マネージャーを取得。現在は別の業務を担当している。

自分がタブマネとして、多文化共生にかかる各種施策の企画・立案や具体的な事業展開ができているとは言えない。

従事していた中で、最も印象に残っているのは、外国人住民の居場所としての日本語教室への参加である。

呉市の日本語教室は、伊藤美智代さんをはじめとしたボランティアの方々に、30年以上継続して支えられている。

外国人参加者の意見を重視した活動であり、毎週土曜日に開催されている。日本語ボランティアの方と外国人住民の方が日本語を学ぶだけではなく、笑いの絶えない非常に温かい交流が毎週行われている。異国の地で不安を抱える方々のヨリドコロとして、居心地が良く癒される空間だと思う。

他にも国際交流協会を通じて行われた、多国籍のサッカー大会では、なぜかワールドカップ並みに意識が高揚していた。

多文化共生にかかる各種施策の推進のために一番必要なものは、「身近に接して、何かを感じ、できることから少しずつでもしていくこと」だと思う。結局は人と人との関わり合いだ。言語や文化の違いはあれど、翻訳機等のコミュニケーションツールの開発も進み、言葉の障壁が低くなってきている。今後も、多文化共生マネージャーとして楽しみたいと思っている。



②茨城県結城郡八千代町 地域おこし協力隊 ニエケひとみ

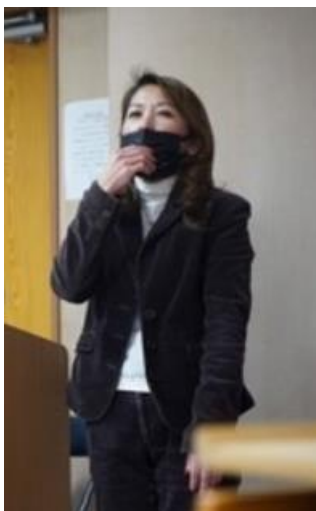
2022年5月、茨城県西にある八千代町（人口2万人外国町民8％）に偶然、地域おこし協力隊として着任、多文化共生支援を行っております。

2021年の暮れに、家族の事情（介護）で単身日本に帰国、それまでは、学生、社会人、妻、母、としてのロールをアジア・アメリカ・欧州の各海外で過ごしてきた30年弱の体験は、今の業務のヒントになっているかもしれません。

【多文化共生施策ゼロの町に縁もゆかりもないよそ者の私が、加速的に多文化共生の活動を行う事（＝ノイズを起こす事）は、人々の生活をかき乱していないか？自分のする事は必要なのか？】1日の終わりに一人懐疑的になりながらも、昼夜・休日に方々から寄せられるSOSコールに、町の社会課題の氷山の一角を見、自分を奮い立たせての繰り返しです。

昨今、人々が矢継ぎ早に『施策の担い手をどうするか？』質問されます。それは、私でなく、町の官民が力を合わせて、創造する、これこそが“まちづくり”ではないかと、思います。

タブマネの役目は、その“まちづくり”の中で、日本全土を横断するネットワークを活用しながら、その土地に適した支援や事業をコーディネートする、提案する、そんなコンサルタント的ロールを担えると、強く思います。多文化共生は時代を餌にする無形のモンスター、“ゴーストバスター”タブマネ's、連携しながら日本の明るい未来を一緒に創っていきましょう！



③長久手市国際交流協会 伊藤雅絵

タブマネ 22 期生（2016 年）の“Misty（ミスティ）”こと、伊藤雅絵です。

22 期生のみなさん、お元気ですか？現在は長久手市国際交流協会事務局に勤務しています。当協会は 1994 年に発足し、2024 年の今年、設立 30 周年を迎えました。私は設立当時から職員として携わり、姉妹都市ベルギー・ワテルロー市との交流やベルギー文化紹介、ホームステイ受入、日本語教室、弁論大会、国際交流フェスタなど会員ボランティアの皆さんの協力のもとで各種事業を行ってきました。

長久手市が多文化共生推進プラン策定をめざしていた頃にタブマネを知り、その知識を得るため研修に参加しました。研修では座学やフィールドワーク、夜は発表に向けての自主勉強会、まるで大学のゼミ合宿のようでした。同期の皆さんとはニックネームで呼び合い、和気あいあいな濃い 1 週間×2 回を過ごしました。

市の多文化共生推進プランは今年から第 2 次に入り、協会も既存事業の他、小・中学校での日本語教育支援とプレクラスの立ち上げ、市役所職員向けのやさしいにほんごの普及、外国人相談窓口などが新たに加わりました。2022 年 4 月からのウクライナ避難民支援は、手探りでしたがタブマネ仲間からの応援に励まされました。

自分の事業に埋没することなく、常にアンテナをはって情報を入手し、その事業を高めていく。一人でやりきるのではなく「誰か手を貸して！」といえる環境を日頃から作って、タブマネとして得た経験値を活かして各分野の人とつながり、次世代につなげていく。そんな、地域に根ざしたタブマネさんを目指してがんばっていきたいと思っています。全国のタブマネのみなさん、がんばりましょう！



④静岡県国際交流協会 事務局長 加山勤子

民間企業を経て、国際交流協会の職員となり年勤務しておりましたが、令和年4月に事務局長になり、これまでの担当業務に加え、役員会の開催や行政庁への申請の手続きなど慣れないことも多く、慌ただしい日々を送っています。

業務としては、相談事業や医療通訳事業に長く関わっていますが、すぐに解決できない課題も多いため、タブマネの皆さんからの情報は本当に参考になります。災害時に必要な広域連携だけでなく、日々の業務にかかる困りごとを相談するなど顔の見える関係性を築けていることで活きたネットワークとなっています。医療分野でも、医療従事者と連携しながらセミナーや講座を開催することで支援の輪が広がっているため、広域かつ様々な職種の方たちとの連携こそが、課題解決の糸口になると実感しています。

静岡県は、派遣・請負で働く定住外国人は依然多い現状があり、協会が無料職業紹介所の免許を取得し、企業と外国人双方に寄り添ったマッチングに取り組んでいます。また、浜松市を中心とする西部地域の企業は、外国人社員の受入れが「当たり前」にもなっています。成功例も失敗例も積みあがっているこの経験は、良くも悪くも静岡県の地域に根付いていると感じています。

事務所を置く静岡市では、今年の月に、人規模のネパール、スリランカ出身の留学生が一度に入学するなど、アフターコロナの中で、外国人の受け入れが加速しています。

外国人との共生をめぐる急激な変化に対応していくためにも、これからは新しい発想が必要ではないでしょうか。みなさんとこれからも情報を共有できたら幸いです。



⑤シェイクハイズ 代表理事 松本里美

タブマネ 22 期生（2016 年）です。国際理解・協力の市民団体として活動していましたが、犬山市に住む外国ルーツの子ども達と出会い、その実情を知った事で、多文化共生に活動をシフト。以来 18 年、外国ルーツの子ども達やその保護者等と、ずっと泣き笑いの日々を送っています。

活動内容は、日本語教室や子どもの放課後日本語・学習支援、就学前支援（プレスクール）、子育てサロン、養成講座や研修・フォーラム開催など。4 年ほど前には多文化農園を立ち上げ、外国人や地域の人と多国籍な野菜を作り、山羊も飼い、近隣住民の憩いの場となっています。

散在地区のさまざまな悩みを解消したくてタブマネ研修を受けましたが、当時の課題目標だった「プレスクール」も立ち上げ、放課後支援には 90 名近くの子が通っています。特徴的な事は、日本の子も共に学んでいる事です。子どもの頃から一緒に育つ事は、将来社会を作担っていく上に、かけ替えのない経験になると信じています。

また、「ネットワークの大切さ」をタブマネ研修で学んだ事で、周りの散在地域の市町の協会や団体と尾張北部ネットワークを組み、行政にも入ってもらい、それぞれの課題やノウハウを共有しながら活動をしています。

22 期同期の仲間とも、今でも LINE や FB でつながっていて、励まし合ったり、情報・刺激も頂いたりもしています。タブマネクロスオーバーの皆さんからの情報は、とても貴重で、有難いものになっています。

犬山市の多文化共生推進の会議や愛知県の地域日本語教育コーディネーター会議等でも、研修で得た知見・ネットワークで、お役に立たせて頂く事もあります。犬山市では、ビジョンに留まり、多文化共生プランがありません。今後はプラン策定を積極的に目指し勉強したいと思っています。また、現在どの市町でも出身国の多様化が進んでいて、子ども達の使用言語も増えて、その対応（通訳・翻訳等）にも苦慮しています。この問題をネットワークの力で解決していきたいと、近々の目標を持っています。

とは言っても、相変わらず運営に四苦八苦、子ども達とまみえながらの現場での毎日です。ひとりでは何もできず、仲間や分野関係なく多団体ともつながっていきながら、今後も活動を続けたいです。共に過ごした子達も 20 歳を超え、大学生になった子が活動を手伝ってくれる時期に入りました。世話焼きソーニャ（私のネックネームです）、若者たちの人材ネットワークもつくりながら、もう少し走りたいと願っています。

⑥鈴鹿国際交流協会 中野千鶴子

タブマネ 28 期生の"Chico"こと中野千鶴子です。私は鈴鹿国際交流協会で、主に友好都市との青少年相互交流プログラムの担当をしています。また、多文化理解の促進を目指し、多くの在住外国人と日本人が触れ合えるおまつりの開催や セミナーの企画にも力を注いでいます。

タブマネの研修には以前から参加したいと願っていましたが、毎年同時期に海外交流プログラムがあり、なかなかタイミングが合いませんでした。しかし、コロナの影響で海外との行き来が制限されたことで時間が生まれ、ようやく念願の研修に参加するチャンスを得ました。

協会では、特に英語圏のコミュニティを担当し、日常的に相談に応じたり情報提供を行ったりしながら信頼関係を築いています。毎年のおまつりには、10 カ国以上の方々が参加し、ステージパフォーマンスや国際屋台村での食文化や雑貨・世界の遊びの紹介などを通じて、多様な文化を紹介しています。友好都市の交流プログラムに参加した若者たちも巻き込みながら、グローバルな視野を持って地域の国際交流と多文化共生を推進し、外国人の方々をサポートする一助となっておりますよう努めています。

フィリピンのコミュニティとは特に密接な連携を図り、英語タガログ語による行政書士相談会を開催したり、彼らが行う海岸清掃活動にも、高校生ボランティアの学生たちと一緒に参加したりしています。こうした活動を通じて既存のネットワークをさらに広げられること、またフィリピンのグループとブラジルのグループが繋がる場面を目にすることや、多国籍のコミュニティが自発的に日本社会の中で行動を起こしてくれることが、私にとって何よりの喜びです。

昨年、鈴鹿にスリランカ出身の方が増えたことをきっかけに、ムスリムの文化や風習を学ぶため、富山で開催された CLAIR の研修に参加し、富山、名古屋、東京のモスクを訪れました。そして、地域に住むムスリムの方々との対話を通じた後、理解を深めるための講座を一般向けに開催しました。多様な価値観や文化の違いに対する誤解が、実際にムスリムの方々の話を聞く中で解消されていく様子に触れ、少しは理解が深まったかなと感じています。加えて、ムスリム女性を主な対象とした「女性のための日本語教室」も開催しました。コミュニケーションをとるにつれ彼女たちの抱える悩みや困りごとを知り、その解決策を日々模索しています。

多文化共生を進めるためには、直接的なコミュニケーションが欠かせません。日常の何気ない会話の中で見えてくることは非常に多く、またそれが本当に楽しいと感じます。そして、その中で得た知見をすぐに多くの人々と共有することが、みんなの幸せに繋がると信じています。



⑦名古屋国際センター 加藤理絵

2012 年度修了生です。とはいえ職歴だけは長く、名古屋国際センター（NIC）に入職したのは 1989 年、35 年も前のことです。当時は、「国際交流の拠点」として予算も潤沢で華やかな国際交流・異文化理解イベントなどおもに日本人市民対象のイベントが中心でした。が、一方で人手不足を補うため査証免除国である中東地域の労働者のオーバーステイと変造テレカ事件がニュースで取り上げられ、相談窓口にはエンターテナーとして繁華街で働くアジア人女性がパスポートを雇用主から取り上げられ無一文で駆け込んでくるなどの案件も少なくありませんでした。頼りにするのは教会や NGO。社会的弱者への対応の限界に無力感を抱える日々でした。

そしてこの時期、東海地域にはブラジル人をはじめとする日系南米人が暮らしはじめ NIC も国際交流から外国人住民支援へと取り組みを移行するターニングポイントを迎えました。私も子どもの教育支援や日本語教室など、いわゆる「多文化共生」事業の担当として様々なプロジェクトに着手する機会を得ましたが、何をするにも行政部局の関心や理解が薄く、NIC の一人相撲のような徒労感を覚えたものです。

タブマネ研修のことは知っていましたが参加する動機となったのは、2011 年の東日本大震災直後、NPO タブマネが滋賀県の JIAM で立ち上げた「多言語支援センター」で全国から駆け付けた同業者と数日間関わった経験です。災害時の連携はもちろん、経験や情報を分かちあうことの大切さ、日々の実践を検証しつつ関係者や機関を巻き込む手法や理論の必要性を実感したのです。研修での学びは大きく、また仲間と先に書いたような共通の悩みを分かち励まし合う機会となり、心機一転、仕事に向かう元気をもらいました。

今、多くのタブマネが全国に広がっています。特に心強いのは異動がつきものの自治体職員の参加です。「多文化共生」マインドを持つ彼らがそれぞれの現場で私たち国際交流協会と両輪となり活躍していただける、その意義はとても大きいのです。

「多文化共生」施策の予算は昔とは比べられないほど拡充されていますが、タブマネの知恵と経験とパッションを活かしてそれぞれの地域オリジナルを作っていきたいですね。



⑧びんど日本語多言語サポートセンター「びんど」 代表 みやのひろこ

一市民として多文化共生の活動にかかわるようになってから 23 年が経ちました。日本語教育に興味を持ったことがきっかけで地域日本語教室の立ち上げに携わり、そこでいわゆるデカセギで来日した人（家族）をはじめとする様々な立場の外国系市民に接したことで、言葉の習得だけではない根深い課題を知り、衝撃を受けたのを思い出します。

このような社会的な課題についてもっと知りたい・考えたい・行動を起こしたいと思い、2013 年にタブマネ研修を受講しました（17 期）。広島県は 32 名（全国 715 名中、2024 年 6 月現在）の登録があるようですが、自治体の協会等に所属している人の連携にも増して民間団体もしくは個人としてのネットワークが強いように感じています。

それらの仲間とともに、2015 年に「タブマネ中国」（現「多文化共生マネージャー中国四国協議会」）を作り、タブマネ以外の多くの方々の協力を得ながらワークショップを開催しました。これをきっかけに、この協議会で行事を企画運営したり、SNS グループで情報を共有しあったりするなど、多くの仲間に刺激を受けながら奮闘しています。とりわけ、SNS グループでは新しい情報を共有していただくことが多く、いつも勉強させていただいています。また、行き詰った時、タブマネ仲間に相談するなど、同志のありがたさをかみしめています。

一方地元での活動としては、2019 年に地元で長年活動してきた仲間が集い「びんど」という団体を立ち上げました。市民として、できることから地道に取り組んでいます。この団体を設立したきっかけは 2018 年の西日本豪雨災害です。その時、タブマネの先輩が実施していた日本語教室関係者の聞き取り活動を参考に、地元福山でもできることからやろうと、外国系市民に対する聞き取り調査を行いました。地元の日本語学校、日本語教室の協力で、2 週間で 10 団体 225 人から状況を聞き取ることができました。その経験から、長年活動している人たちがつながって活動していくこと、その声を届けてつなげていくことの必要性を感じ「びんど」が誕生しました。

おかげさまで、県や市からも受託事業をいただいたり、多文化共生関連事業の企画や運営の際に声をかけていただいたりするなど、まちづくりの一役を担わせていただけていると感じています。これからも、タブマネネットワークでつながっている先輩や仲間からのインプットを地元に戻元していけるように、自分にできることを地道に頑張っていきたいと思います。



⑨南砺市友好交流協会 渡辺幹子

27期の渡辺です。富山県にある南砺市友好交流協会に所属しています。当協会は20年前に合併した南砺市の旧8町村で、それぞれ行われていた交流事業を取りまとめるために発足した団体です。特に、中学生が交流のある海外の最大5都市の中から1つ選んで派遣事業に参加できることは、大きな魅力の一つだと思います。そんな中で私は主に日本語教室の運営や外国文化紹介などを担当しています。

前職は日本語教師で、外国の方々と日常的に接していましたが、今の職に就いてから外国人住民の困りごとや外国人児童生徒についての相談を何一つともに解決できず、無力感を感じていました。タブマネの研修で講師陣や同期の活躍に刺激を受け、以前より積極的に周辺の国際交流協会や団体さんに協力依頼や問い合わせをして、つながりを広げられるようになりました。

当協会では昨年、外国につながるこどもを支援する教室を開設し、今年度は大人の日本語教室のクラスを一つ増やすことができましたが、多くの方々の協力を得て実現できたという事を実感しています。

タブマネには素晴らしい活躍している方々が大勢いて「私もタブマネです」というのは気が引けますが、勇気を振り絞って自分の名刺にタブマネ認定の旨を記載しています。興味を持ってくださる方や、「タブマネ仲間です！」と声をかけてくださる方との新たなつながりを自然と作ってくれるため、引っ込み思案な私にとって強い味方となっています。



⑩ 富山市民国際交流協会 日南田美幸

1980年代後半から企業に勤める傍ら日本語教室で日本語ボランティアをしていました。この活動を通じて多くのことを学びました。1992年に総務庁（内閣府）主催「第4回世界青年の船」に参加し、13ヵ国約300名の青年たちと約2ヶ月間船上で寝食を共にしながらスペイン・バルセロナまでの洋上研修を体験しました。湾岸戦争終結の翌年でありましたが、アラブ諸国をはじめいろいろな地域からの青年が参加、このプログラムを通じて、世界の多様性を認識し、多面的なものの見方の大切さを実感しました。

富山市民国際交流協会は、昨年度設立30周年を迎えました。この間、時代とともに活動の意義、目的は変化し、昨今課題がますます複雑化しています。少しでも問題を解決するためには、多くの知恵とネットワークが大切だと思います。担当業務の一つにボランティア養成講座の開催があります。地域には国籍に関係なく、様々な経験を持った方がおられ、一人でも多くの方に、その経験を活かし活動に参加してもらえる仕組み作りができたと思います。1994年から北陸3県持ち回りで「北陸国際交流連絡会」を開催していますが、共有できることが多々あると実感しています。

2003年に国際交流協力実践者全国会議が開催され、その中で課題を共有でき、今後もそのような繋がりを持ちたいと思い、その後に始まったタブマネの研修を2010年に受講しました。タブマネにはいろいろなセクターの方がおられ、また地域を超えて、情報交換できるのは強みです。メーリングリストでの情報共有に加え、最近はオンラインミーティングがあり、より繋がりやすくなったと思います。日本各地で災害が起こっており、繋がっていることの大切さ、そして心強さを感じます。



⑪ 浜松市 和田祐哉

お久しぶりです。タブマネ 11 期の和田です。

現在は、浜松市こども若者政策課で少子化対策や若者支援等の仕事をしています。

私がタブマネを志したのは、純粋に好奇心でした。多くの外国の方が住民として生活され、その人数も出身地域も増えていく中で「なにかサポートができないか」、「自分の可能性を広げることができないか」という思いでした。

行政職員ということで、なかなか多文化共生に繋がる部署には縁が遠く、「健康保険」、「高齢者福祉」、「児童福祉」、等に携わり、様々な外国人の方を支援してきました。

中でも、児童相談所での勤務では苦勞をしました。自国では「躰や教育の一環」という認識でも日本国内では「児童虐待」に該当すること、一時保護という日本人でも理解が難しい制度を説明して同意をもらうことは困難でした。

もちろん、浜松市では、多言語のパンフレットや通訳タブレットは配備をしていますが、言語が通じれば解決というわけではありません。全てにおいて必要なのは、「相手への共感」だと思います。そのためには、相手が何を求めているか、何に不安を感じているかを察することが必要です。時間はかかります。

その支柱として、研修で外国人住民に係る諸課題や地域における外国人の活躍について理解を深めていたことが強みとして活かされています。

今後も、高き気宇を持ち、言語の壁を越えて共感の橋を架け、日々の業務に臨んでいきたいと思っています。

